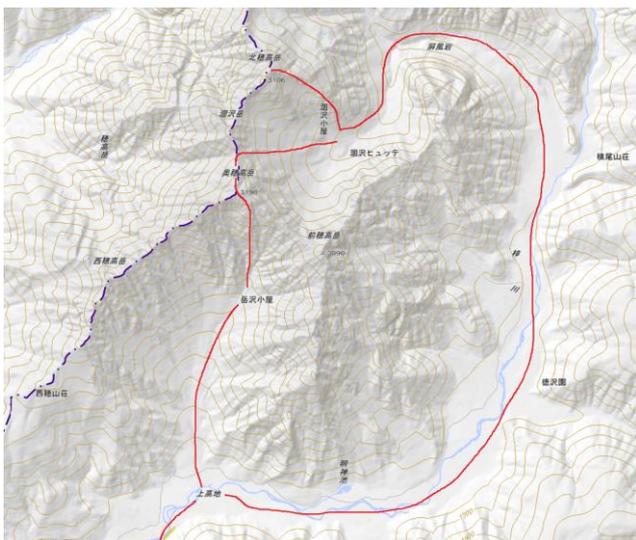


デンソー山岳部 2018年度 春山合宿報告書(穂高)

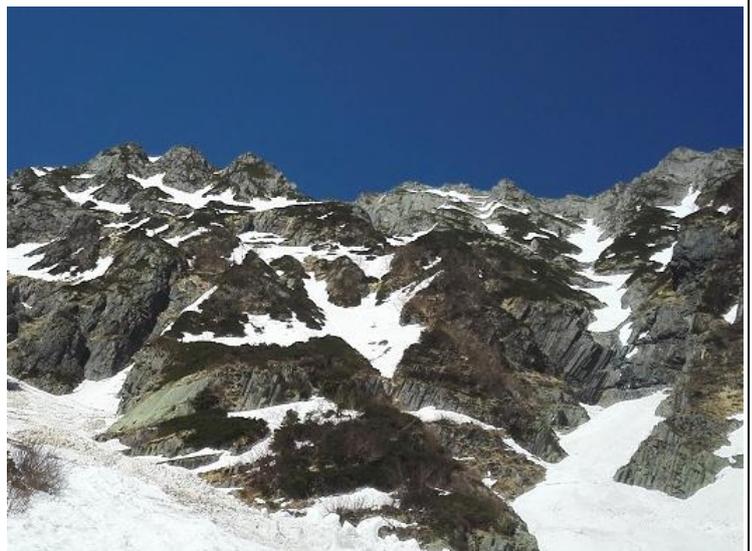
- 山域 北アルプス 奥穂高岳南陵-北穂高岳
- 日程 平成30年4月28日~4月30日
- メンバー 館谷昌弥 (CL, 食糧, 会計)、小田修三 (SL, 装備, 記録, 気象)



霞沢岳から望む奥穂南陵



ルート概要



取り付き点からトリコニー I, II, III 峰

第1日 : 4/28(土) 晴れ 行動=2H15M

刈谷(06:00) — 沢渡バスターミナル(09:20) — 上高地(10:30) — 岳沢小屋テン場(12:45)

4/28の早朝に集合。装備の最終チェックを実施。今回の山行は軽量化が重要となるため装備を極力削るべく事前に館谷と共同装備から個人装備までを詳細打ち合わせ済みである。お互い装備に過不足ないことを確認して沢渡に向け出発。天候は快晴である。沢渡のバスターミナルに車を止め、上高地に入る。上高地から岳沢までの登りをゆっくりと登っていく。天候も良く気持ちが良い。時折、今回のルートとなるトリコニーが見える。雪はそんなについていない。今年はどうやら雪解けが早いようである。岳沢についてテントを張った後に早速明日のルートを下見。取り付け点付近には大きなシュルンドが口を開けている。朝一の雪の締まった時間であれば超えられそうである。取り付け点とルートを館谷と議論し、小屋に戻って明日の登攀成功を祈ってビールで乾杯した。(記:小田)

第2日 : 4/29(日) 晴れ 行動=8H00M

起床(3:00)→岳沢小屋テン場(4:00)→トリコニーⅡ峰(9:15)→南陵の頭(11:10)→奥穂高岳(11:30)→潤沢テン場(13:00)

3:00 起床。時間短縮のため火は起こさず、手早くパンを食べてパッキングに移る。テントを撤収し、4:00 岳沢小屋を出発。よく締まった雪にアイゼンを効かせながら登る。後ろを振り返ると、たくさんのヘッドライトの明かりが見える。4:30 南稜取り付け。無線の確認をし、登攀具の準備をする。最初の関門は、雪面に大きく口を開けたシュルンド。雪が締まっており、下見しておいた地点から問題なく超える。(写真1:後続パーティとシュルンド)



写真1:後続パーティとシュルンド

10mほどの雪壁を越え、小滝でロープを出す。1Pは館谷がリード。残置ハーケンでランニングを取り、立ち木で終了点。小田がフォローで登り、つるべで登攀継続。落石に気を付けながら2Pを終え、V字の雪壁の下端に到着。初めはコンテだったが、途中で邪魔になり、ロープを外してフリーで雪壁を登る。傾斜が強いため、アイゼンの前爪を確実に効かせる。ふくらはぎへ疲労が大きく、ペースが上がらない。所々にあるシュルンドに気を付けながら、少しずつ登っていく。(写真2:V字雪壁上から)



写真2:V字雪壁上から

V字雪壁の詰め不安定な岩場を突破し、ブッシュの濃い斜面を登る。トラバース気味に登っていくと、再び雪壁。今度は更に傾斜が強く、滑りだすと止まらないであろう斜面に緊張感が増す。先行パーティの後を追いつながら登っていくと、雪庇の下側に出た。尾根に出るためには、ほぼ垂直な雪庇を乗っ越さなければならない。先行パーティがロープを出して慎重に越えている間、ハイマツでセルフビレイを取って待つ。後続パーティも追いついてきて、渋滞が起き始める。10分ほど待ち、ようやく順番が来る。館谷がリードで登る。ほんの数mだが、乗っ越す前にスノーバーでランニングを取る。登ること自体は難しくなかったが、先に待っていたのはただ広い雪の斜面で、アンカーが作れない。アックスも半分しか刺さらないため、ピックを2本打ち込んでビレイをする。フォローの小田も難なく登り、20mほど雪面を登ると、トリコニーI峰への岩場が始まる。完全にドライな岩を、快適に登っていく。(写真3:岩を登る館谷)



写真3:岩を登る館谷

有名なチムニーを登り、リッジを左から巻くと、8:40 トリコニーI峰。直後のナイフリッジでロープを出す。小田がリード。ホールド、スタンスともに豊富だが、中々の高度感。落ちると岳沢小屋まで止まらなさそうだ。フォローの館谷が登った後ロープを外し、II峰へと向かう。天気が良く、雪が緩んできており、緊張しながら登る。9:15 トリコニーII峰。一本取る。(写真4:II峰側よりI峰を臨む)



写真4:II峰側よりI峰を臨む

その後は雪とブッシュ・岩を交互に繰り返しながら高度を上げていく。ロープを出す箇所はない。急登で息が上がりながらも、振り返ればつい笑ってしまうような絶景が広がっている。最後にガレた岩場を詰め上げ、11:10 南稜の頭。二人で健闘を称えあう。(写真5:急斜のトラバース)(写真6:岳沢方面)

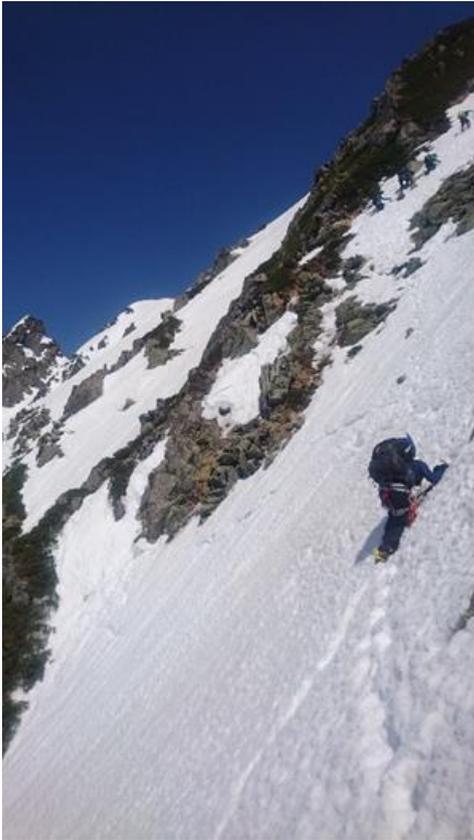


写真5:急斜のトラバース



写真6:岳沢方面

歩きやすい道を登り、11:30 奥穂高岳山頂。360度広がる景色に見惚れる。100名山チャレンジの手ぬぐいを広げ記念撮影。しばらくのんびりした後、涸沢方面に下山開始。一般登山道とはいえ、さすがに春の穂高、侮れない急斜面が何か所かあった。慎重に下る。(写真7:山頂手ぬぐい)



写真7:山頂手ぬぐい

穂高岳山荘を経て、13:00 涸沢。最高の天気の中、テントを設営し、濡れた物を干し、小屋のテラスにてビールで乾杯。おでんをつつきながら今日の登攀について盛り上がる。気持ちよくなってきたところでテントに戻り昼寝。晩御飯はアルファ米とフリーズドライの親子丼。夕方に織機のパーティが涸沢に到着。テントに少しお邪魔し、互いの無事を祈りあった。明日も早いので、19:30 ごろ早めの就寝。(写真 8:ビール)(写真 9:涸沢テント)

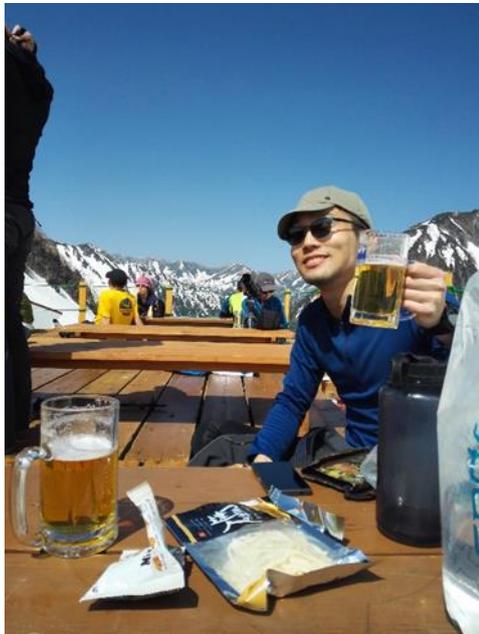


写真 8:ビール



写真 9:涸沢テント

第3日 : 4/30(月) 晴れ 行動=8H00M

起床(3:00)→涸沢テニ場(4:00)→北穂高岳(6:00)→涸沢(7:00)→横尾(9:30)→上高地(12:00)→帰刈谷

3:00に起床し、アルファ米の朝食を摂る。今日も天気は良さそうである。一足先に織機のメンバーは出発したようだ。我々も手早く準備を済ませ、後を追う。雪はしっかりと締まっており、歩きやすい。途中で朝日が登ってきた。雪山の Morgenrot は何度見ても綺麗である。途中で織機のメンバーが北穂東稜に取り付いているのを横目で見ながら、我々は沢筋を詰めて登った。結構急な斜面であるが、昨日ほどの傾斜はない。2時間ほどでピークに到達。今日も絶景が広がっている。写真を撮ってから早々に、朝日を浴びて程よく緩んだ雪面を快調に涸沢まで下り、テント撤収。今回の山行を振り返りながら上高地まで下った。(写真 10:東稜に取り付く織機隊)(写真 11:北穂山頂)



写真 10:東稜に取り付く織機隊



写真 11:北穂山頂

【装備所見】

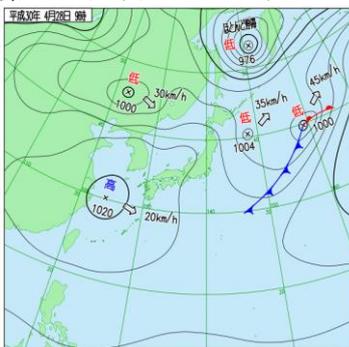
今回のルートは登攀となるため、極力装備を少なくした。基本的にお湯しか沸かさなため、共同装備はコッヘル小1、ボンベM缶1、テントはカミナドームとした。また個人の登攀具も2人とも最小限に絞り込んだため、従来の残雪期縦走装備よりも大分軽量にできた。(それでも登攀時には十分な重量感)メンバー間にて平地合宿で装備詳細の認識を合わせておいて良かったと思う。

【食料】

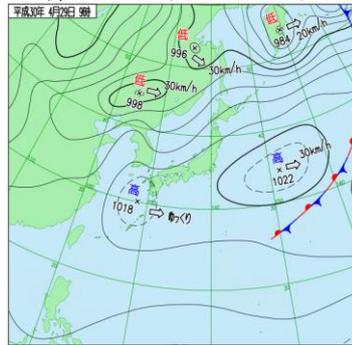
軽量化のため、ガス缶はMサイズとし、初日と2日目の朝はガスを使わない物を選んだ。また、2日目の夜以降はアルファ米とフリーズドライのみとした。結果として60g/230gしかガスを使わなかったので、もう少し初日の食事を充実させても良かった。

【気象】

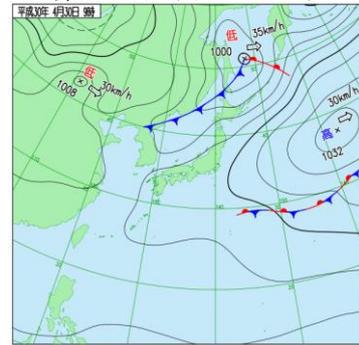
第1日目(4/28 9:00)



第2日目(4/29 9:00)



第3日目(4/30 9:00)



合宿期間中快晴。3日目のみ一時曇り。

【会計】

高速代 3920 円
 ガソリン代 6700 円
 車消費費 2150 円
 駐車場 1800 円
 バス代 4100 円
 岳沢テント泊 2000 円
 潤沢テント泊 2000 円
 食料 4000 円
 合計 26670 円

【リーダー所見】

残雪期に奥穂南稜を登る。そう決めた当初は、漠然とした不安がありました。入念に下調べをし、小田さんと何度も打ち合わせ、装備を洗練させ計画を練っていく中で、不安は薄れ山行への期待が高まっていきました。幸い天候に恵まれ、最高の3日間となりました。装備や食料も過不足なく、まさに狙った通りの山行であったと思います。今回の結果に慢心せず、誠実な山登りを続けていきたいです。ザイルパートナーの小田さん、留守部員の方々に感謝します。

【感想】

奥穂南陵にいつか行きたいと館谷と話をしていた時は、こんなに早く実現するとは思っていませんでした。3月に霞沢から見た奥穂南陵は急峻かつ荘厳で、登れるだろうかと不安になったと同時に楽しみにもなりました。ルート、装備、食料の詳細を二人して平地で議論して臨み、天候に恵まれ、狙い通りの会心の山行ができたと思います。トリコニーから見た景色は色んな意味で従来とは一味違うものでした。また体力や技術面での課題も見え、良い勉強となった山行でした。同行の館谷、留守部員の方々に感謝。(小田)